

学習サイクルから見た予習の意義とその促進

報告者 センター教授 市川伸一

1. 生徒の学習サイクルとリソース

まず、私の方から学習相談室絡みのことで、話題提供させていただきます。これまで学習相談室を2年半余りやってきて、附属の先生方からの要望としては、それが一体どうやって授業のあり方とか、生徒達の学習の改善に結び付くのかということをはっきりとしたいということがありました。つまり、たしかに、なかなか授業ではわからないという子ども達が学習相談室に来て、我々が何らかの学習相談を行って、その子ども達は何かがわかるようになって帰っていくということがあるのかもしれない。また、私達はそういう経験を通して、大学院生も私もいろいろ得るところがあるわけですが、それだけではなくて、例えば、附属全体の授業のあり方、あるいは生徒の学習のあり方にもう少し結び付くような考え方や、成果なりを示していく必要があるということをおっしゃっていただきました。

そういう意味では、今日は私の方から「こんなことが問題だと思っている」、「こんな風に考えた方がいいのではないか」と思うということを少し大胆に言わせていただきます。今日私が話すことは、おそらく半分ぐらいの先生は、「なんて馬鹿なことを言うのだろう」と思われるかもしれません。3割ぐらいの先生は「なるほど、そういう考え方があるのだったら、少し授業でもできることがあるかもしれない」と思ってくださるかもしれません。もし、少しでも賛同してくださる方がいれば、一緒にそういうことを授業の中で考えていくことができればと思っています。

基本的な問題意識は、とにかく学習相談室には「授業がわからない」という子がやってくることに発しています。なぜ授業がわからないのかというのは、生徒の授業の受け方とかあるいは授業が難しいからということもありますし、生徒自身の普段の学習行動の問題もあります。私達はわりとそこに着目しています。要するに、授業の前にどんなことをやって授業に臨んでいるのか、それから授業の後にどんなことをやって自分なりに定着させているのかという授業の前後に注目しています。昨年の「附属論集」の中でも学習相談室のことを記事として書きましたが、私達が学習する中で既存の知識や技

能を習得するという「習得サイクル」というのと、自分のテーマを見つけてそれを探究していくという「探究サイクル」と、大きく分けるとこの2つの学習のサイクルがあります。

学習相談室が扱っているのは、主にこの知識・技能の習得という習得サイクルの方です。習得サイクルの学習は、基本的には、「予習—授業—復習」というもので1つのサイクルをなしていると思っています。特に学年が上がるほど、何の準備もせずにいきなり授業に出て、授業でわかったり、少し宿題ぐらいやって定着するというのは、なかなか上手くいかない。予習、復習の比重が学年とともに高くなっていくのだと思います。小学校であれば、それらを全部授業の中で包み込んで、授業の中で「導入—展開—まとめ」ということで、けっこう子ども達がついてこられるかもしれないですが、学年が上がるにつれて、むしろ授業だけではなかなか学習がうまくいなくなってくる。その時、家での学習スキルとか学習習慣というものが重要になってくるというふうに私達は考えています。

ところが、それが当たり前と思う方もいれば、当たり前と思わない先生あるいは生徒もいます。そこで、私達として一番気になっていたのが、いったい授業の前に予習するという生徒がどれくらいいるのかということです。実態としてはほとんどいません。9割方の生徒は予習していません。あと、授業の中では、どれくらい授業後のことを視野に入れて先生方も何か手がかりを残したり、あるいは教科書を使って「こういうところを復習するといい」というようなこともなされているのかと。それから、教科書をどれくらいリソースとして授業の後にも使うことを促して下さっているかというあたりに興味がありました。あと、教科書というのは共通にもっている一つのリソースですが、実際に復習でどれくらい教科書がリソースとして使われているのか、その辺りに興味がありました。

2. 教員への質問紙調査——教科書、予習、復習、宿題について

そこで、お配りしたのはこの附属の先生方にもお渡し

してやっていただいた調査です。ほとんどのの方が自分も回答したという方ではないかと思いますが、一応まずこれを見ていただきたいと思います。質問は大きく分けると4つありました。

質問1はまず、「授業でどれくらい教科書を使うか」ということです。これは主に算数・数学について調べたかったので、小学校は「算数を想定して下さい」ということになっています。中学校については、メインは数学ですが、他の教科も参考になりますので、回答して下さい方はお願いしますということで依頼しました。Nと書いてあるところがありますが、これは回答者の人数です。表の一番右のNですね。ですから、中学校では数学が圧倒的に多いです。他の教科はやや少ない。高校は基本的には今回は調査の対象外だったのですが、高校の先生でももし回答して下さい方がいれば参考になりますので、お願いしますということで、これはごく少数です。小学校を見ると、授業中に教科書を「全て使う」あるいは「4分の3くらい使う」、教科書を使うという方はけっこう多いです。その下中学校ですけれども、中学校は教科書によっていろいろですが、このような分布です。国語とか英語はやっぱり随分使う。社会となると、ちょっとしか使わないで自分の資料でという方もあります。

一番見たかったのは、右にある質問2。ここが予習に関する部分です。「児童・生徒が予習として教科書を読むことについてどう思いますか」で、「1. ぜひしたほうがよいと思う」「2. したほうがよいと思うが、必ずというほどではない」、3は「あまり必要とは思わない」、4は「しないほうがよい」です。予習で教科書なんか読んでこない方がいいというのは4になります。これは図2の方を見て下さい。小学校を見ますと、小学校の算数ですね、「ぜひしたほうがよいと思う」というのはほとんどいません。それから、「したほうがよいと思うが、必ずというほどではない」が少しと、それから「あまり必要とは思わない」というあたりが多いです。「しないほうがよい」という方も若干います。つまり、読んでこない方がむしろよいということです。中学校になりますと、教科による違いもくっきり出てきます。今回見たかった数学ですけれども、数学の先生や理科の先生というのは「あまり読まないでもいい」あるいは「読んでこないでもいい」という方が多い。あるいは理科ですと「読まないほうがよい」という方もけっこういます。他の教科、国語とか社会とか英語もあります。英語は随分ばらつきもあるんですけれども、英語でも「予習してこないほうがよい」という考えもあるんですね。

次のページを見ていただいて、質問の3です、これは

復習の時です。「児童・生徒が復習のときに教科書を読むことについてどう思いますか」ということです。これはかなり多くの先生が、復習のときは「読んだほうがよい」と、「ぜひ読んだほうがよい」と言っています。「読んだほうがよいが、必ずというほどではない」という人も若干いますが、予習に比べれば、復習のときに教科書を読むというのはわりと「よいことだ、するに越したことはない」という先生が多いようです。

その右の質問4は、「どれくらい宿題を出しますか」ということです。宿題というののもちょっと気になっていまして、最近、特に小学校では宿題を非常に出さなくなっているようです。「宿題は出すべきではない」という先生も小学校ではけっこういます。「学習は授業で完結すべきだ」というわけです。小学校はとにかく1人の先生がいろいろな教科を見ているから、「トータルとしてどれくらい出しますか」、それから中学校では「自分の教科でどれくらい出していますか」ということで結果が出ています。

3. 予習に否定的な意見

うしろの資料にのせたのは、実は一番面白いところだと思うのですが、予習のときに教科書を読むことについての否定的な意見と肯定的な意見を、具体的な記述の中から抜き出したものです。まず、資料1（省略）のほうは、なぜ読む必要はないと思うのか、読んでこないほうがむしろよいと思うかについての理由です。少し見てみますと、くっきりしてくるのですが、例えば最初小学校の段階で、「導入では特に、自ら問題を解決しようとする志向がそがれる」と。104の方、「導入などの場面で課題を考えるにあたり、既習を生かし、自立解決時間と集団検討の場での気づき、発見を大事にする」。ここはかなり集約されています。

つまり、授業の中で問題にあたって、そこで自分で考える、あるいは集団で考える、そしてわかるというのが理想であって、「家で読んできてしまったら自分で考えないではないか」ということなんですね。その後、要するに自分で考える、自分で見つける、それから中学校の意見も見てみますと、右側の049、ここから中学校の数学の先生になります。049の方は、「導入部分などは、新鮮味を持たせるために、初めて出会う課題の方がよい」。「新鮮味」という言葉があります。それから、037「教科の特質かとも思うが、授業を通して新しい発見や数学の美しさを実感させたい場合が多いので、予習的なことはしないほうがよい」ということですね。それから他にも「新鮮さ」というようなことがたくさん出てきます。

理科は、例えば041の中学校理科の先生ですね。「理科の学習では基本的に実験などをしてから、事実（内容）を確認していくスタイルがいいと考えるので、予習しなくてよいと思うから。実験での驚きが減る」。つまり、先に教科書で見てしまえば驚きが減る、ということですね。あと、国語もあります。056ですが、「文章（特に文学作品）は初読の新鮮な印象を大切にすべきだ」と。授業で初めてあたってほしいというわけです。次のページに行きますと、やはり国語で068、高校の古文の先生ですが、「授業中に集中させ、その間にすべて終わらせる」と。「授業中にすべて理解できるようにしているから」と、何も予習しなくてもということですね。英語は、私はちょっと意外だったのですが、「音声から入るため、文字での確認はその次の段階だ」と。まず授業で耳で聞いてほしいと。先に家で教科書を読んで目で見えてしまうということをやってほしくないということのようです。このように、予習してくるによってかえって弊害がある、あるいはする必要はないという考え方をいくつか紹介させていただきました。

4. 予習に肯定的な意見

一方では予習に肯定的な意見もあります。資料2（省略）を見てください。例えば、071の小学校の先生ですが、「授業前に教科書の問題に一度ふれ、考えておくことが大切だと思うため。また授業時には2回目になるので分かっていることはより深く、分からなかったことはその時に解決できる」。087の先生は「1/3くらいの子は一応目を通して授業に臨んでいます。意欲的に取り組んでいます」。中学校の先生で073という方がいますが、この方は、「予習もない、その場その場の対応では、理解してくれたような顔だけで真の理解には至っていない場合が多い」と。「しかし」ということなのでしょうね、かといって「塾で先行してしまうと、授業を軽視する傾向が多分に見られた」と。質問2Cについてもちょっと書いておきましたが、「分かる、できる喜びをつかませる指導の過程でより確かな事柄をつかませるためにも、教科書は繰り返し目を通してしながら発展させていくことを基本とするためにも、教科書を軽視しないことを指導する」と。で、「指導教師自身も指導の中心に教科書を据えるということが大切だ」ということです。「しかし、教科書内容だけでは物足りない生徒達には他の教材を用意して個別指導に心がける配慮は必要」。こういうふういくつかあります。

他にも、国語、社会などでも、やっぱり予習してくることをかなり促すという考え方が出ています。078の高校

英語の先生は、「まず自分で考えることが必要だから」、要するに予習で一度自分で考えることが必要ということだと思います。079の家庭科の先生も1人入っていきますが、「予習すると授業の内容が理解しやすく、学習内容が定着する」と。ただ、実態として、質問2Bというのは「生徒の実態はいかがですか」ということですが、「予習してくる生徒はほぼいない」というような形です。

ですから、考え方がまず相当分かれるというのを見ていただけたと思います。大まかに言いますと、予習してこない方がいいという先生は、要するに授業の理想的なモデルとして、初めて授業で問題に出会って、そして自分で考える。あるいはみんなで話し合う。そして「わかった」という喜びとか感動が授業の中で味わえる。定着は少し足りないでしょうから、それはドリルなどで若干家で補う。こういう流れというのが1つの理想としてあるのだと思います。ただ、それが理想通りにいっているかどうかというところが一番の問題だと思います。つまり、授業の中で初めて問題に出会って、そして自分であるいはみんなで考えて「わかった」という感動を味わえる、そういううまくいっているケースがどれくらいあるかと。これは、おそらく先生方はテストなどをやってみると、それが実現されているかをつかんでいらっしゃると思います。

5. 提案——「予習タイム」を足がかりに

数としては十分ではありませんけれども、成績のどれくらいの子がどういうことを「わからない」と言って相談室に来るかということを見ていると、少なくともそういう子たちは、授業の中では先生の話がほとんどわからない。つまり、「わかった」という感動・喜びではなくて、授業ではほとんどわからなかったと、非常に欲求不満をもっています。家でノートを見返してもどうもわからないということで、塾に行ったり、相談室に来たり、あるいは先生に質問に行く子もいると思いますが、そこでやっと「わかった」となる。結局、授業では感動し損なっているという状態です。多くの子どもたちが、先ほどの理想のルートに乗っていくのであればいいのですが、そうでない場合にちょっと考える必要があるのだらうと思います。

しかし、かと言って、多くの先生方が指摘しているような新鮮味とか感動ということがなくなってしまうこともたしかにまずいです。両立させる方法なんですけれども、私の方で今考えていることというのがあります。まず、予習を促すことは私は基本的には大事だと思っています。つまり、特に授業でなかなか感動できない、理解

もできずに欲求不満が溜まるだけという生徒には、5分でもいいから一応何をやるかということと、「どこは読んだだけではわからないか」という疑問をもって授業に臨むことを相談室ではすすめています。5分の予習によって50分の授業が楽しめるようになると。それこそ、授業で感動できるようになる。そのためには、「5分でもいいから予習を」ということを来た生徒には言っています。しかし、それでもなかなか予習するとは限りません。予習をどうやっていいかわからないという生徒もいっぱいいますので。

私が今考えているのは、授業の中で最初の5分くらい「予習タイム」を設けるということを実験的にできたらと思っています。予習タイムでやることというのは、基本的には教科書を通読して何がわからないかということをはっきりさせることです。小学校の先生は「読んじやたらもうわかっちゃうじゃないか」と心配しているようですが、中学校にもなると、読んだだけでわかる人は逆にそういませんから、むしろ何がわからないかということ「疑問カード」のようなものを書いてもらうということくらいを最初の5分間にやってもらう。次には、少しそれをもとにグループごとに話し合う、教え合うという時間を5分なり10分なり設ける。その後に、グループで出てきた問題を先生の方で丁寧に説明したりして、教科書の内容というのをできるだけ全員が理解できる形にもっていくわけです。さらにその先に、それこそ初めて出会う問題などを用意して、教科書を超えた授業をそこで展開する。自分の頭で考える、みんなで話し合って考えるというようなことをやっていただく。そういう展開でやってみることはできないだろうかと思っています。もし、そういうことを少し、1単元分とか、やってみようという先生がいらっしゃったら、少しでも一緒にやってみて、どういう風になるかを、見られたらと思っています。

<討 議>

汐見：A組は予習をするということを原則とする授業をやって、B組はしないという授業をやってその理解度はどちらが高いとかそういうデータはないんですかね。

市川：予習ということを取り上げた心理学的な研究は、私はほとんど知らないですね。結局、ここで見てわかるように、予習をしてもらうことを積極的に促す先生は多くありません。塾などでは先行して教えているところがけっこうあると思います。多分、その方が効果的だと思って、塾ではそうやって

ているのでしょう。あまり心理学の方でも家庭学習のを中心にしたのというのがないのです。もし、教科教育の方で予習ということターゲットにした研究があれば教えていただきたいです。

汐見：附属の先生方から何か質問はありますでしょうか？

市川：その前に補足ですが、その予習タイムをいつまでも授業中に設けておく必要はないのです。これで予習の仕方というのがわかれば、もうそれは「家でやってこようね」と、授業から切り離していいと思います。学習相談室ですと、相談室に来る前に予習してくることをすすめます。それは、ポストイットをわからないところに貼ってくるという作業です。ノートなり、教科書なりを読んで、「ここがわからない」と思ったらそこにペタペタと貼った状態で来てほしいと。普段の授業に出るときでも私は予習はその程度で十分だと思っています。「自分で例題を解いて来るように」とか言うのと、これは敷居が高くてやりませんので、教科書を通読して何がわからないかでポストイットを貼ってくるので十分だと思っています。しかし、予習を嫌がる先生からすると、それでも「嫌だ」と言うわけですね。「例題を見ちゃったら考えないじゃないか」という点からすると、そういうことすらもやってほしくないという先生もいると思います。

質問(英語科)：予習をするかしないかというのは、例えば私の場合はレッスンごとにどこに力点を置いて目標を定めるかということ生徒に要求することを変えています。というのは、例えば英語でわかりやすく言うならば、「話す・聞く・書く・読む」というようなことで目標を設定すると、聞く時には、むしろ予習をしてほしくないというか、展開の中でいろんな形で聞き取りの練習をしていく。で、「それは自分の普段の学習のやり方に生かさない」というような提案をしていきます。ただ、読み物だったりする場合には、やはり読んできてほしい。「これこれをこういう形で調べてきなさい」というような形で、特に高校生の場合は設定します。というようなことで、到達目標を設定する条件が違ってくる場合には、予習の必要性なども変わってくるのではないかと思います。

それから、予習のやり方を提案し、経験させるということは重要だと思うのですが、もうすでに「できてしまっているなあ」と思っている子と足りないと思っている子では、例えば5分なら5分、

10分なら10分の時間の過ごし方というのが非常に差が出てくると思います。例えば、50分のうちの10分を予習タイムに設定した場合に、数回やっただけでその取り組みの興味の違いが出るのではないかなと。できちゃってるなと思う子は早々と次に何をしたらいいかなと思うだろうし、できてないっていう子は必要なところまでいかないという可能性もあるし、どちらも興味を早々と失ってしまうっていう可能性もあるかなと思います。そこを工夫して悟られないように設定していかないと、予習タイムというのも習慣づけるのは特に高校生では難しいかと思っています。

あと、市川先生のお話の中で、「感動し損なっている」という表現がありました。日常の授業の中では、やはりこちらの授業の展開とかで、ねらいを上手く汲み取る生徒というのは常に感動してくれる様子はあります。その一方、「どうしてここで常に感動し損なってしまうんだろう」という子もいます。例えば導入のところの関心の持ち方であるとか、結論のところまで辿り着かないとかいうようなことで、この子たちは感動し損なっているというのか、損なわせてしまっているというかなどを日常の授業の中で感じているというのは事実です。そこに解決策がほしいという気持ちがあります。

質問(社会科)：前任校が高校だったのですが、世界史とか日本史とか授業をする前に、B5の紙半分くらいに切って、「前もってプリント」という名前を付けて、それを授業の初めに配って、ゴシック体で書かれている教科書内容ぐらひは理解できるような問題を出して、5分程度でやってもらってから、それを解答してもらって進んでいくというのをやりました。それを最初にやった場合と後でやった場合にどちらがいいかなと思って、クラスを変えてやってみたりしたんですけども、定着度はあまり変わりなかったような記憶があります。今もたまたま明日授業があるので、「前もってプリント」を作ったのでコピーがあるんですけども、やっぱり5問ぐらい問題出して、初めの10分とか、長いと15分くらいかかっちゃうんですけども、けっこう集中してとりあえず静かにやってくれます。それをやった後、その内容について説明とかします。社会科だとそういう5問くらいやったとしても、その説明とか、あるいはその他の関連することを教員の方で話をするので、興味が失われ

ることはないのではないかとと思っています。

汐見：そういう方式である程度やっておられるし、それはそれなりの効果もあるということですかね。そういうご意見ですか。

市川：それは一種の小テストですよ。

汐見：教師がやる内容の中身を質問形式で出しておられるわけですね。

市川：私のほうは基本的には、要するにテキストをある程度読んでほしいというところに力点があるわけです。つまり、もともとかなり難しい内容になってくるので、中高になると、むしろ手持ちの材料で使えるものは使って、予備知識なり、授業の流れなり、疑問点、一番大きなのは疑問点だと思うんですけど、それをはっきりさせた上で授業に臨もうと。すると、まったく白紙の状態で授業に出るよりよっぽど授業のポイントもつかめるし、わかりやすくなるという趣旨なんです。

質問(国語科)：現代文と古文と漢文と、今年度3種類教えています。現代文は、教科書をもらったら生徒は読みたい子はどんどん読んじゃっていて、それはそれでかまわないと思っているんですね。それで「これはこういう内容なんだな」というふうに思っていて、初発の感想みたいのを聞くわけなんですけども、けっこういろんなことを考えて言ってくれます。それを授業を通して読んでいくと、やはり違った読み取りになっていく。それに対して、「ああこういうふうには読むんだ」というそういう感動があるから、私は予習するというか、先に読むことに対してはいいと思っています。

現代文については、「意味調べをしなさい」とか、そういうことは言いますが、特に「これらのことをしなさい」ということは言わないで、勝手に「読みな」という感じです。古文と漢文については、品詞分解、文法説明を自分でやってみて、わからないところに印をつけてきなさいと。調べていると時間がかかるから、10分なら10分という時間を決めて、「わからないことを探してごらん」と言われても、その探し方がわからない。やってみて答えが書けなかったところに印をつけるということを、授業の一番最初の4月の時点で言っています。なので、時間がある子はやってきます。今日はどうもみんな忙しかったのか、誰もやっていないなと思う時には、「じゃあみんなこれから5分間あげるから自力でわかんないところをやってみよう」ということをしています。

漢文も同じような感じでやっていて、今年度6年生2クラス同じところを教えているんですけども、やっぱり6年生は時間がないので、あまり家ではやってこないんですね。ただ、授業時数にちょっと偏りがありまして、ずいぶん差が出てきてしまっているんです。余裕があるクラスの方では、「これから5分間自分でこの部分をやらせらん。やってみてわからないところを見つけます」という時間を多くやっています。もう一つは、こっちでどんどん生徒に答えさせて、できなかったら「これはこうだよ」と教えちゃうというやり方で教えちゃうクラスになっています。比較すると平均点が今回のテストで3点くらい違っているようでした。非常に低かったんですけども、それぞれ平均が52点と49点でした。成績の悪い子が集まっちゃったのか、それとも授業のやり方によるものなのかという確認はしていないんですけども、やっぱり余裕を持って自分でわからないことを見つけて、それで授業をやっていくところの方が質問も多いのでいいのかなという印象は受けます。

市川：結局、授業で生徒にわかってほしいし、感動してほしいというのは、先生の共通の願いだと思いますし、何よりも生徒自身が「あ、今日はこういうことがわかった。面白かった。楽しかった」と感じたいと思っているんですよね。ただ、実際には内容が難しくなると、とても授業の中で初めて出会った問題についてそういうふうに理解して、感動するというふうになかなかいかないんじゃないか。復習の時とか、塾でもう一度習って初めて感動するというよりも、1つフェーズを早くできないだろうかということなんです。つまり、予習の段階でいろいろなわからないこととかを明確にした上で授業に臨んで、「なるほどこうだったのか」という意味での感動です。それがむしろトータルに見た時、年間で見た時、あるいはできるだけ多くの生徒を視野に入れた時には、感動する授業に

なるのではないかと。今おっしゃったように、予習してすでに文章を読んでいる子が授業で、「あ、こういう読み方もあるのか」というのも感動だと思いますし、数学や理科でもそういうことがあるのではないかと。

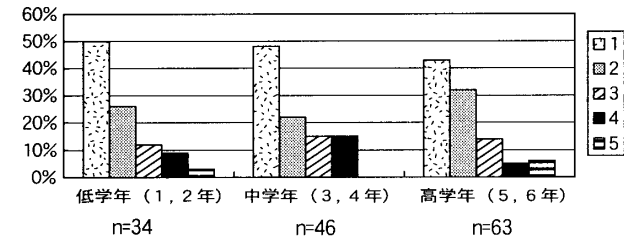
一つだけ補足しますと、私が自分の大学での授業で、去年からやっている「予習レポート制度」というのがあります。これは最初に予習タイムなんて取らずに、東大生ですし、家で予習をしてわかったこと、わからなかったこと、疑問に思ったことと、それから、意見が著者とは違うというようなことをレポートにして出して下さい、というものです。授業ではそれをもとにしてディスカッションをしたり、わからないというところは丁寧に説明したりするというふうにして、予習の部分を完全に各自に託しています。この方法について学生からの評価を聞いたんですけども、これはものすごく評判はいいです。99%の学生が「予習レポート制度は最初は嫌だと思ったけど、すごくよかった」というのです。私は本の中の1章だけについて少なくともやって下さいと言ったんですけども、「全章についてやるべきだ」と書いてきた学生もいました。全章やったら受講数が減るので、たぶん全章にはしませんが、少なくとも予習という形で授業に臨むことがむしろ授業でも面白さを倍加させることになるという仮説をもって今やっています。

その分、授業では教科書に留まらない内容を用意するというのもあると思います。それは教科書の一步先に行けることになると思うので、教科書の内容は予習と丁寧な説明でやってしまう。その先はむしろ教科書を越えることで、教科書べったりではないような授業にできるのではないかとこの考え方をもっているわけです。これが、中学や高校の授業でどこまで可能なかはわかりません。また先生方の方からご意見がありましたらよろしくお願いします。

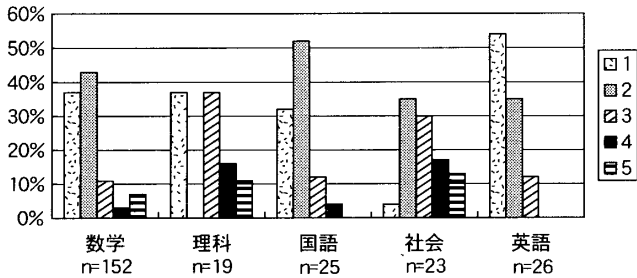
質問 1 A：授業でどのくらい教科書を使いますか。最も近いものを選んでください。

- 1. ほぼすべての記述や問題を子どもが見るくらいに使う
- 2. 記述や問題の4分の3くらい使う
- 3. 記述や問題の半分くらい使う
- 4. 記述や問題の4分の1くらい使う
- 5. 教科書はほとんど使わない

普段の教科書使用（小学校・算数）



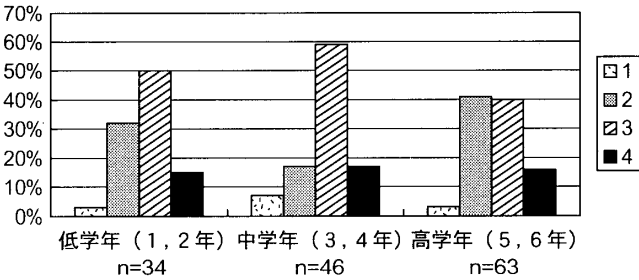
普段の教科書使用（中学校）



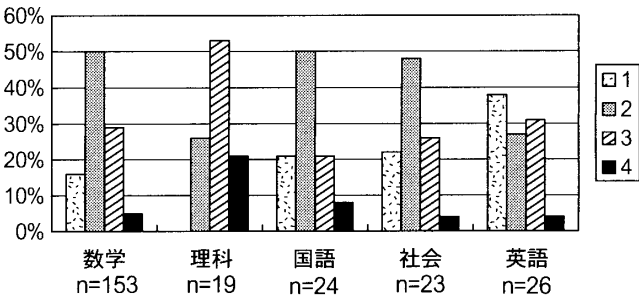
質問 2 A：児童・生徒が予習として教科書を読んできることについてどう思いますか

- 1. ぜひしたほうがよいと思う
- 2. したほうがよいが、必ずというほどではない
- 3. あまり必要とは思わない
- 4. しないほうがよい

予習における教科書使用（小学校・算数）



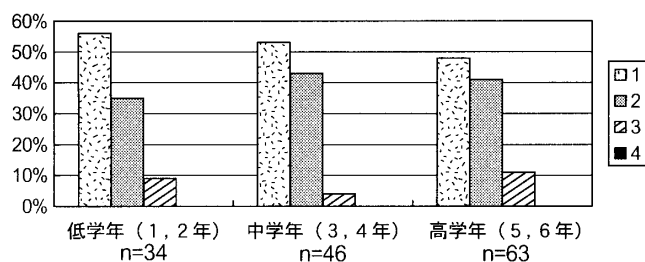
予習における教科書使用（中学校）



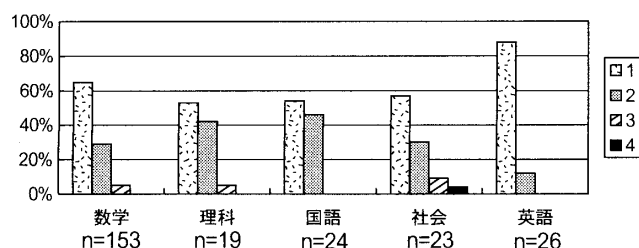
質問 3 A：児童・生徒が復習のときに教科書を読むこと
についてどう思いますか

1. ぜひしたほうがよいと思う
2. したほうがよいが、必ずというほどではない
3. あまり必要とは思わない
4. しないほうがよい

復習における教科書使用（小学校・算数）



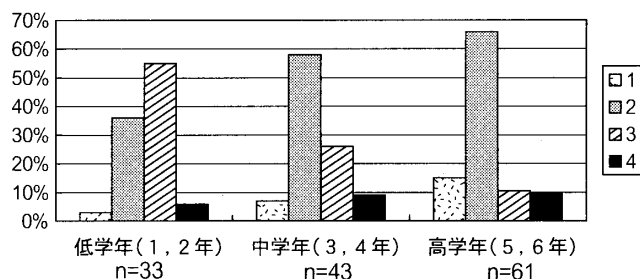
復習における教科書使用（中学校）



質問 4 A：児童・生徒にどれくらい宿題を出しますか（小
学校が担当の場合は、すべての教科をトータル
として考え下さい）

1. 平均して1日1時間分くらい（もしくはそれ以上）
の量を出す
2. 平均して1日30分くらいの量を出す
3. 平均して1日10分くらいの量を出す
4. 宿題はほとんど出さない

宿題の量（小学校・全教科の合計）



宿題の量（中学校）

